

インドと私（その2）

田中裕子（5組）

サールナートで36年

仏教の4大聖地の一つ、サールナートの多くの仏教寺院の中でもスリランカ寺と呼ばれるムルガンダクティ（初転法輪寺）は他の聖地にはない日本人画家による仏伝図があること、寺院が三蔵法師玄奘の記述に基づき、原寸大に忠実に再建されていることや、ブッダの遺骨の一部が収められているといった点で、この地では最も古く重要な寺院です。



私たちもこの寺院を、右回りで真言を唱えながらお参りするのを日課にしています。戦前の野生司香雪画伯の偉業、絵画修復に当たられた画家の皆様、そして偶然にも、この事業に上田高校同期の宮原豊さん（9組）が関わられていたこと、こんなに日本から遠く離れている所との不思議なご縁を感じています。

11月には、修復事業の寄附者の名簿のプレートが収められるとのこと。この事業とそれを支えた多くの方々からの寄附があることを参拝者にもっと知ってもらえるよう尽力したいと思っています。

天の声が建てた？寺院、日本寺

ここで、日蓮宗の先代の佐々木鳳定、妙定ご上人ご夫妻によって建立された日月山法輪寺を紹介します。ご主人の鳳定ご上人が初めてインドにいらして、帰りの飛行機の中でお酒を飲んで酔っ払い「こんなごきたねえ国に二度と来るもんか」とつぶやいた時、突然「お前はまたインドに来るぞー」という大音声がかえったのだそうです。

この天の声のとおり、ご上人はインドを再訪、寺院建立開始となりました。

建築資材などは横浜から船積みしカルカッタで陸揚げ、さらに陸路でサールナートへと、日本の素材と方式を徹底して貫いた高い志が感じられる静謐な佇まいの寺院です。

現在は娘さんの妙實ご上人が先代の遺志を継ぎ、診療所と学校の建設計画が進行中です。

現在、少人数ですが日本語クラスも開かれ、私もボランティアで週2回ほど教えています。

ダライ・ラマとネルー首相の合意で

インドに亡命したダライ・ラマがチベット仏教と文化の保持のための教育研究機関の設立を当時のネルー首相に要請し、ブッダが初めて説法をした地が教育には最もふさわしいと設立されたのがチベット大学です。ここでは、チベット語のみで保存されている文献

をサンスクリット語やヒンディー語に還元すること、伝統的な仏教学の教育研究を近代的なシステムで提供するという目的が謳われています。

初めは教室も無く、州立のサンスクリット大学に間借りし、生徒たちは交代制で、早い時は朝3時半に起きてバスで通ったそうです。

現在では、チベット人難民の子弟、特に親兄弟と離れ一人でヒマラヤを越えて来た生徒たちは勉強熱心です。チベットが中国の自治区になる以前は、仏教の高等教育を受けるため、皆、首都のラサに行き、僧院で学問を修めるのが通例でしたが、今は自由な環境のこの大学や、インド各地で再興された僧院が受け皿になっています。

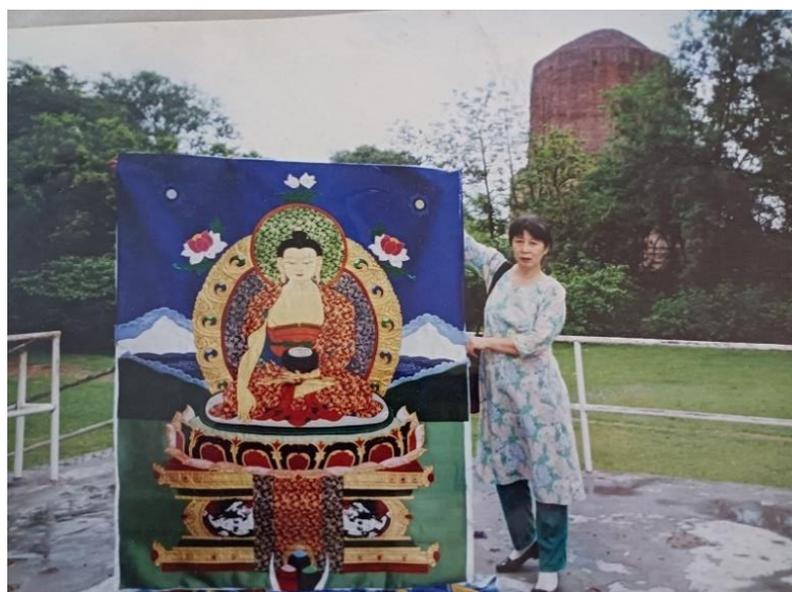
平和な日が来ることを

私の制作した仏教画はブリヤート（編注：ロシア連邦を構成する共和国のひとつ）のチベット寺院にあります。ウクライナの戦争ではブリヤートの僧院で戦死者のための法要が行われ、その模様がTVで放映されていました。

10年前、夫のイェルサレム、ヘブライ大学での共同研究に同行、イスラエルに9ヶ月滞在、ガザは別にしてパレスチナにも何度も行きました。

人懐こく家族思いのパレスチナの運転手さん、道に迷っているとすぐに声を掛けてくれるイスラエル人、どちらも普通のいい人たちでした。

今回ハマスが壊して侵入したフェンスは金網でしたが、ベツレヘムで私が見たのは背丈



よりはるかに高く聳えるように銀色に光って、向こう側に越えようなどと言う気持ちはたちまち失せてしまうヒマラヤ級と思える高い壁でした。

今、一日も早く、いずれの戦争も終り、ガザやパレスチナのフェンスが無くなる日が来ることを祈るばかりです。

ブリヤートのチベット寺院に奉納した仏教画を持つ筆者
(2023年11月1日記)

以上